

演題一覧

医学教育研究センター

- ・ Neocaridina sp. “Bee shrimp” の紋様形成に関する研究
鳴瀬 善久, 廣瀬 英司, 都築 英明
自然科学ユニット
- ・ 小分子量 G タンパク質 Ran システムに関連する遺伝子の配列解析
廣瀬 英司¹⁾, 二又 亮²⁾, 鳴瀬 善久¹⁾
¹⁾ 解剖学ユニット, ²⁾ 本学保健医療学部4年生
- ・ 胸腺皮質上皮細胞における LTβR シグナルの役割
糸井 マナミ, 千葉 章太
免疫・微生物学ユニット
- ・ Foxn1 により調節される胸腺上皮細胞の分化及び機能に重要な分子の解析
千葉 章太, 糸井 マナミ
免疫・微生物学ユニット
- ・ 心拍動による肝臓の拡散強調画像の信号変化の観察
梅田 雅宏, 渡邊 康晴, 村瀬 智一, 樋口 敏宏
医療情報学ユニット
- ・ 仮想灸刺激に伴う脳活動変化の検討
村瀬 智一, 樋口 敏宏, 梅田 雅宏, 渡邊 康晴
脳神経外科学ユニット (博士研究員)
- ・ アロ角膜内皮細胞移植マウスモデルを用いたアロ感作と免疫寛容の検討
山田 潤¹⁾, 羽室 淳爾²⁾, 篠宮 克彦²⁾, 寒川 裕之²⁾, 堀内 稔子¹⁾, 木下 茂²⁾
¹⁾ 眼科学ユニット, ²⁾ 京都府立医科大学眼科学教室

鍼灸学部

- ・ ラット腓骨を用いた骨欠損モデルに対する鍼通電刺激の効果
井上 基浩, 中島 美和
臨床鍼灸学講座
- ・ 幻肢痛に対して神経根鍼通電療法が奏功した1症例
中島 美和, 井上 基浩
臨床鍼灸学講座
- ・ モートン病に対する鍼治療—1症例報告—
山口 成広, 井上 基浩, 中島 美和
臨床鍼灸学講座 (大学院修士2年生)
- ・ 効果的なトリガーポイント検索方法の検証～肩こり被験者を対象として～
小田切 耕平, 井上 基浩, 中島 美和, 北小路 博司
臨床鍼灸学講座 (大学院修士1年生)
- ・ 在宅医療における鍼灸治療の応用の試み
江川 雅人, 福田 晋平, 鶴 浩幸, 片山 憲史
保健・老年鍼灸学講座
- ・ 頸部・顔面部などの体性感覚刺激が自覚的耳鳴に与える影響
鶴 浩幸¹⁾, 安藤 文紀²⁾, 皇甫 泰明¹⁾, 福田 晋平¹⁾, 江川 雅人¹⁾, 片山 憲史¹⁾
¹⁾ 保健・老年鍼灸学講座, ²⁾ 明治東洋医学院専門学校

- ・パーキンソン病の歩行障害に対する鍼治療の効果について
福田 晋平, 江川 雅人, 栗山 長門, 今西 二郎, 片山 憲史
 保健・老年鍼灸学講座 (博士研究員)
- ・小児鍼の効果—アトピー性皮膚炎患者も含めた検討—
境野 昌行¹⁾, 糸井 マナミ²⁾, 江川 雅人¹⁾
¹⁾ 保健・老年鍼灸学講座, ²⁾ 免疫・微生物学教室

看護学部

- ・A 大学看護学部における「補完代替医療／療法」教育の意義
岡田 朱民, 小山 敦代, 梶谷 康子
 基礎看護学講座
- ・看護系大学生に対する音楽による不安の緩和効果と自律神経の変化に関する研究
藤田 智恵子
 成人・老年看護学講座
- ・看護学部カリキュラムに対する有用について—看護学部卒業生の現状調査 その5—
松岡 みどり, 山下 八重子, 三浦 康代
 看護学部
- ・看護学部退学者に関する分析
山下 八重子, 都築 英明
 看護学部
- ・看護学部卒業生の55名の現状 看護学部卒業生の現状調査その1
山下 八重子, 三浦 康代, 松岡 みどり
 看護学部
- ・看護学部卒業生の職場定着の動向 看護学部卒業生の現状調査その2
山下 八重子, 三浦 康代, 松岡 みどり
 看護学部
- ・地域住民の睡眠障害と生活習慣病因子及び生活環境因子との関連：
 農山村地域と振興住宅地域の比較検討
佐藤 裕見子¹⁾, 安田 斉²⁾
¹⁾ 地域保健看護学講座, ²⁾ 滋賀医科大学大学院公衆衛生看護学講座
- ・地域住民の睡眠障害とメタボリックシンドロームの関連
佐藤 裕見子
 地域保健看護学講座
- ・看護学部卒業生の看護における行動や考えについての先行研究との比較
 —看護学部卒業生動向調査 その3—
三浦 康代, 山下 八重子, 松岡 みどり
 地域保健看護学講座
- ・職場の奨学金受給の有無による看護学部卒業生の行動や考えの比較
 —看護学部卒業生動向調査 その4—
三浦 康代, 山下 八重子, 松岡 みどり
 看護学部

ラット腓骨を用いた骨欠損モデルに対する鍼通電刺激の効果

井上 基浩, 中島 美和

明治国際医療大学臨床鍼灸学講座

【目的】骨欠損モデルを用いて、骨癒合能に及ぼす鍼通電刺激の影響を調査した。

【方法】腓骨に2mm gapの骨欠損を作成（Wistar ラット 40匹）し、鍼通電群（EA群, n=20）、無処置群（Control群, n=20）の2群に割り付けた。EA群は骨切り遠位断端を陰極とした間欠的直流鍼通電を6週間行った。モデル作成後3日, 1週経過時に遠位断端部を採取し（各群, 各評価日, n=5）、HE染色、Bone Morphogenetic Protein-2（BMP-2）の免疫による組織学的検討を行った。また、1週毎にX線を用いgap長を計測した（各群n=10）。

【結果】HE染色ではEA群で細胞数の有意な増加を認め（ $p<0.05$ ）、BMP-2の免疫でも、EA群で強い発現傾向を示した。gap長の経時変化では、両群間に交互作用を認め（ $p<0.0001$ ）、Control群ではgap長が拡大し、EA群では短縮を認めた。

【考察・結語】EA群では陰極側における細胞数の有意な増加と、BMP-2の発現増大傾向が見られ、結果的に骨欠損部の癒合が得られたことから、鍼通電刺激は成長因子の発現に促進的に作用し、骨癒合能に有益に働くと考えた。

幻肢痛に対して神経根鍼通電療法が奏功した1症例

中島 美和, 井上 基浩

臨床鍼灸学講座

【諸言】下肢切断後の幻肢痛に対し、腰部への鍼治療を数回行った後に、症状部位の支配神経を考慮して神経根鍼通電療法を試みた結果を報告する。

【症例】78歳, 男性。主訴：右下肢幻肢痛。現病歴：X-33年, 交通事故により右大腿中央部にて下肢切断術を施行。術直後から幻肢部の疼痛を自覚。X年9月, 本学附属病院整形外科を受診, 同日より鍼治療を開始。現症：右大腿前面～下腿前面内側の疼痛。治療：1～5診は, L4高位を中心に腰部傍脊柱部刺鍼を行い, 6～10診は, X線透視下に右L4神経根部への鍼通電療法を施行した（1回/週）。評価：幻肢痛の程度についてVisual Analogue Scale（VAS: mm）にて, 毎回の治療前後に記録した。1, 6, 10診にはPain Disability Assessment Scale（PDAS: 点）を用いて評価した。

【経過】1～5診においては治療直後に症状が軽減するも, 持続効果は見られなかった（治療前VAS: 1診95, 5診91）。6～10診においては直後効果とともに効果持続時間の延長を認めた（治療前VAS: 6診95, 10診47）。PDASは, 40→41→27となった。

【結語】下肢切断後の幻肢痛に対して, 脊髄分節性に幻肢痛が現れている場合には支配神経を考慮した神経根部への鍼通電療法が有用な治療法となる可能性を考えた。

モートン病に対する鍼治療 —1 症例報告—

山口 成広, 井上 基浩, 中島 美和

臨床鍼灸学講座

【緒言】発症から2年が経過したモートン病に対して、障害神経走行部への鍼治療を施行し、良好な結果が得られたので報告する。

【症例】61歳，女性．主訴：右第3・4趾底側部の異常感覚，知覚鈍麻．現病歴：X-2年，右第3・4趾底側部の異常感覚が出現，その後も症状が持続．X年10月，整形外科を受診，モートン病と診断され，鍼治療を開始．現症：足先部に体重をかけた際に症状が出現．右第3・4趾足底中足骨間部でTinel like sign 陽性，症状部位の知覚鈍麻（7/10）．治療：脛骨神経（足根管部）への置鍼術を施行（1回／週，計5回）．評価：異常感覚の程度をVisual Analogue Scale（VAS）にて記録し，各治療日の前1週間を通した異常感覚の状況をWong-Baker Face Rating Scale（FS）にて確認した．また，知覚鈍麻を触覚検査にて確認し，Pain Disability Assessment Scale（PDAS）によりQOL評価を行った．

【経過】VASおよびFSは治療により漸減し，治療終了4週後においても改善した状態を維持した．PDASは治療前9点→治療終了4週後0点となった．知覚鈍麻は5回の治療により消失した．

【考察・結語】障害神経への刺鍼はモートン病に対して有用であり，その機序として神経血流の変化や神経活動の修飾を誘起する可能性を考えた．

効果的なトリガーポイント検索方法の検証 ～肩こり被験者を対象として～

小田切 耕平, 井上 基浩, 中島 美和, 北小路 博司

臨床鍼灸学講座

【目的】我々は先行研究において，トリガーポイント発現筋への負荷方法の違いによって当該筋の疼痛の誘発状況が異なることを確認した．今回，被験者数を追加して検証した結果を報告する．

【方法】先行研究と同一の方法にて検討した．慢性的な肩こりを有する被験者30名を対象として，トリガーポイント発現筋を同定した後，全ての被験者に当該筋を1.他動的に伸展（伸展），2.自動的に収縮（自動収縮），3.抵抗を加えて自動的に収縮（抵抗収縮），4.他動的に短縮（短縮）させ，同定した部位に誘発される疼痛の程度をVisual Analogue Scale（VAS）にて記録した．【結果】伸展 57.5 ± 15.2 （mm, mean \pm S.D.），抵抗収縮 32.0 ± 21.6 ，自動収縮 36.7 ± 20.9 ，他動短縮 11.1 ± 12.6 となり，伸展が有意に高値であり（vs. 抵抗収縮： $p < 0.001$ ，vs. 自動収縮： $p < 0.0001$ ，vs. 短縮： $p < 0.0001$ ），他動短縮は有意に低値を示した（vs. 抵抗収縮： $p < 0.0001$ ，vs. 自動収縮： $p < 0.0001$ ）．

【考察】被験者数を追加した今回の検討においても，先行研究と同様の結果を示したことから，当該筋への負荷によってトリガーポイントを確認する際，伸展が最も検出し易い方法であることが示唆された．

在宅医療における鍼灸治療の応用の試み

江川 雅人, 福田 晋平, 鶴 浩幸, 片山 憲史

保健・老年鍼灸学講座

地域在住の高齢者1例を対象に在宅医療における鍼灸治療の応用を試みた。症例：83歳女性。診断名：脊椎側弯症，変形性腰椎症，脊柱管狭窄症，変形性膝関節症，高血圧症等。主訴：腰痛，膝痛，歩行困難。10年程前より腰痛を自覚し，コルセットが処方されたが次第に歩行困難が悪化した。夫と二人暮らし。週1回デイケアサービス，月1回本学附属病院を受診していた。杖付き，歩行器を用いての自力歩行は可能。腰部は腰椎右側弯，腰椎の傍脊柱から側腹部に疼痛と圧痛，下腿のだるさと冷感を認めた。膝関節には内側裂隙部から鵞足部に圧痛，大腿四頭筋の緊張と萎縮を認めた。鍼灸治療は疼痛には圧痛点や筋緊張部位を治療点とし，置鍼術や温灸療法を行った。治療頻度は1回／週程度とした。歩行機能は携帯型歩行測定器とTimed Up and Go testにより，活動機能は老研式活動機能評価，QOLはPGCモラルスケール，介護負担感は多次元介護負担感尺度を用いて評価した。バイタルサインや治療結果は主治医とケアマネージャーに報告し，情報を共有した。1年間，40回の鍼灸治療により疼痛が軽減し，自立歩行とADLが維持された。客観的な評価では安定傾向が示された。介護者の満足度も高く，治療継続を希望された。鍼灸治療は多様な症状に適応し，在宅医療を担う医療として有効と考えられた。

頸部・顔面部などの体性感覚刺激が自覚的耳鳴に与える影響

鶴 浩幸¹⁾，安藤 文紀²⁾，皇甫 泰明¹⁾，
福田 晋平¹⁾，江川 雅人¹⁾，片山 憲史¹⁾

¹⁾ 保健・老年鍼灸学講座，²⁾ 明治東洋医学院専門学校

鍼灸治療が耳鳴を軽減させることがよくある。近年，耳鳴は聴覚の影響だけでなく，体性感覚（皮膚や筋肉から生じる感覚）を引き起こす刺激（筋肉の運動や電気治療，指圧など）の影響を受けることが指摘されており，鍼灸治療も体性感覚刺激の1種と考えられる。そこで，我々は耳鳴と体性感覚刺激の関係性を明らかにする第1段階として，本研究を行った。対象は静かな環境下で耳鳴を感じる健康成人27名（平均年齢25歳）とした。被験者は耳栓とイヤーマフを装着して，環境音が30dB以下の静かな部屋の中に座り，以下の3種類の刺激によって耳鳴が変化するか否かが検討された。刺激は「1. 頸や顔面の自動運動」，「2. 頸や顔面にある経穴（ツボ）の指圧」，「3. 手や頸にある経穴への電気治療」などが各30秒間行われた。その結果，自動運動により耳鳴の大きさが軽減した者は11名，指圧では15名，電気治療では23名であった。また，耳鳴の大きさを軽減させるには，自動運動より指圧や電気治療の方が効果的であることが示唆された。特に電気治療では耳の後下部に位置する完骨穴を刺激した時の効果が大きいことが分かった。なお，本研究はJSPS科研費基盤研究C24500840の助成を受けたものである。

パーキンソン病の歩行障害に対する鍼治療の効果について

福田 晋平, 江川 雅人, 栗山 長門, 今西 二郎, 片山 憲史

保健・老年鍼灸学講座

【目的】パーキンソン病（以下、PD）の歩行障害に対する鍼治療の効果について、携帯型歩行計で評価した歩行機能を指標に検討した。

【方法】対象は薬物治療を受けているPD患者13例であった。鍼治療方法は、弁証論治による全身的治疗と下肢の筋血流や筋緊張の改善を目的に施術した。評価は、鍼治療施術前と直後に携帯型歩行計で歩行機能を記録した。また、自覚的な歩行状態はface scaleで記録した。

【結果】鍼治療の施術前後で、歩行の力強さを示す平均歩行加速度や、歩幅、歩行速度は有意に増加し（ $p < 0.05$ ）、歩行機能の改善を認めた。また、自覚的な歩行状態を示すFace scaleも有意に改善し、歩行機能との相関がみられた。

【考察】鍼治療の施術直後に、薬物治療を受けているPD患者に鍼治療を行い歩行機能と自覚的な歩行状態が改善したことは、PDの歩行障害に対して鍼治療が有用である可能性を示唆したものと考えられた。今後は、鍼治療による治療効果の継続性を検討する。なお、本研究はJSPS科研費30641998の助成を受けたものである。

小児鍼の効果

—アトピー性皮膚炎患者も含めた検討—

境野 昌行¹⁾, 糸井 マナミ²⁾, 江川 雅人¹⁾

¹⁾ 保健・老年鍼灸学講座, ²⁾ 免疫・微生物学教室

【目的】小児鍼が健康状態と皮膚状態に及ぼす影響について検討した。【対象】1才から10才以下の小児10名（男児5名、女児5名、 4.7 ± 2.7 才）とした。その内、アトピー性皮膚炎（AD）患者は4名だった。【方法】対象を治療群7名と無治療群3名の2群にランダムに振り分け、1ヶ月間の介入を行った。小児鍼は、ローラー鍼（重量39g、鋼製のメッキ加工）を使用した。刺激の圧は心地よい程度とし、両前腕、両下腿、背部、腹部、後頸部に対して1回5分以内の治療を行い、週1～2回の頻度とした。【評価】介入前と介入終了時に評価を行った。項目は、①健康に及ぼす影響（10項目の質問表）、②皮膚の状態（テープストリッピングによる角層細胞の評価）、③PO-SCORAD（ADの重症度評価、対象者のみ）の3点とした。【結果】①治療群では「夜泣き」「便秘」「食欲」「キーキー声を出す」の4項目で、改善割合が無治療群を上回っていた。②角層細胞が重層剥離する割合は、無治療群で1名が減少したのに対し、治療群では4名の改善がみられた。③ADの重症度に関する数値に明らかな傾向は見られなかった。【結論】ローラー鍼治療は、表皮角化細胞のターンオーバーに影響を与える可能性が示された。今後、症例を重ねて検討する予定である。

A 大学看護学部における「補完代替医療／療法」教育の意義

岡田 朱民, 小山 敦代, 糀谷 康子

基礎看護学講座

【目的】A 大学看護学部は、特徴の一つとして補完代替医療／療法（Complementary and Alternative Medicine/Therapies；以下 CAM/CAT）を導入しており、学びと課題について既に報告してきた。本研究目的は、CAM/CAT 教育の意義を明らかにすることである。

【方法】対象：5 期生 63 名。調査日：2014 年 3 月。方法：自記式質問紙の集合調査。内容：CAM/CAT への関心と満足感及び、大学で学んだ CAM/CAT。分析：データは単純集計し、記述内容は内容分析の手法に基づきカテゴリー化を行った。倫理的配慮：目的外使用禁止、匿名性の確保、回答の任意性の保証等を書面で説明し、回答をもって同意とした。所属大学倫理委員会の承認を得て実施した（受付番号 25-96）。

【結果】回収数：62 名（回収率：98.4%）。CAM/CAT は、80%以上が関心を持って学んでおり、その教育に満足していた。学んだ CAM/CAT で多かったのは、「灸」「鍼」「アロマセラピー」であり、臨地実習で実施したのは「マッサージ」「アロマセラピー」「指圧」が多かった。また、90%以上が卒業後臨床で取り入れたいとし、資格取得を課題に挙げていた。

【結論】80%以上が CAM/CAT の教育に関心を持って学び、その教育に満足していることや、臨地実習において学んだ CAM/CAT を看護ケアに取り入れていることから教育の意義は大きいことが明らかになった。課題に挙げている資格については、2014 年度から統合医療評価認証機構認定アロマセラピーコース（選択）開設により、更なる期待ができる。

本研究は、第 18 回日本統合医療学会にて発表したものである。

看護学部カリキュラムに対する有用について

—看護学部卒業生の現状調査 その5—

松岡 みどり, 山下 八重子, 三浦 康代

看護学部

京都府内では看護学部が次々と増設されている。本学は他大学と比べると立地条件で不利なことから、本学は何等かの対応が必要で他大学との差別化を図ることや、看護学部卒業生の動向調査の結果より、本学カリキュラムの有用な側面を探り、今後の方向性につなげる必要がある。アンケート結果より、約 6 割の卒業生は、本学の学びは看護現場で役立つと考えており、現場での本学の学びの有用性が示唆された。卒業生が具体的に学びのどの側面が、現場において役立つと考えられているのか調査結果は、西洋医学と東洋医学が同時に学べるという意見が記載の約半数を占めていた。このことは他大学との差別化を図ると言う点で有利となる。看護学部開設当初から、本学では西洋・東洋医学を統合した視点などを取り入れ、「東洋医学概論」と「東洋医学診断・治療学」を専門基礎科目に入れることで、理論・実践と系統だったカリキュラムを編成している。

従来、看護学は西洋医学をベースとして学ぶが、看護師が行う日々の看護実践の中には、患者中心の看護、自然治癒力、全人的医療の考え方、そして疾病予防や個別性の重要性など東洋医学との接点も多い。これらのことから今回の調査結果が得られたと推察することができる。

看護学部退学者に関する分析

山下 八重子, 都築 英明

看護学部

明治国際医療大学（以下本学）の看護学部は2014年に開設後9期生を迎えた。この9年間の看護学部の入学者総数は571名で退学者総数は57名であり、入学者の約1割を占めている退学者が記載した退学理由は、第1位進路変更、第2位一身上の都合、第3位経済的理由、第4位が学力不足であった。在籍日数が退学年次より長期となっている者が多いことから、休学や留年が介在していると推察でき、休学の理由は留年が殆どで休学後の退学が約1/3であった。経済的理由については、看護学部は病院奨学金受給も可能なため、学力不足が根底にあると考察できる。つまり、退学の原因は学力不足が8割以上を占めていると判断できる。

退学者の入試状況は、センター入試1名、社会人入試4名、一般入試17名の計22名を除いた残りの35名は推薦入試であった。推薦入試はAO入試が15名、推薦入試12名、指定校推薦入試は8名であった。これらの推薦入試は、学力試験を実施していないために実際の学力が分からない。学力不足が原因の退学者は推薦入試が一番多いことが明らかになったことから、今後は推薦入試枠での入学志願者の学力の引き上げが必要である。推薦入試判断基準値としての評定値は高校のレベルに格差があり、入学後にその判定に驚かされることもあるほどである。推薦入試であっても何らかの方法で学力を測ることが望ましい。学力不足で退学者を出さないようにするために推薦入試における学力判定のための工夫が必要である。

看護学部卒業生の55名の現状 看護学部卒業生の現状調査その1

山下 八重子, 三浦 康代, 松岡 みどり

看護学部

2014年には看護大学が228校となり今後も増える傾向にある。教育の評価は輩出する卒業生に対する職場での評価が大きく影響する。明治国際医療大学看護学部（以下本学）は、2006年に開設され2014年4月までに239名の卒業生を輩出している。既に卒業生が5期に達したことから、本学初の卒業生動向調査を大学の研究助成を受けて実施した。アンケートは2014年11月～12月に卒業生全員に郵送したが、宛先不明として27通が配達されずに戻った。有効回答は55名で回収率26%（宛先不明者27名は除く）であった。今回の調査は卒業生の約4分の1の回答であり、卒業後の動向の全体像が掴めたとはいえないながらも、ある程度の現状把握が可能である。離職では既に転職3回の者もみられた。しかし、転職後の現在の仕事に対する意見は「やりがい」などの肯定的意見が否定的意見の2倍を占めていたことから、自分に合った職場を見つけ、仕事を評価されるなどして職場への愛着が見出せている結果と考える。卒業時の職場選択の問題、専門的能力の問題があると推察する。

アンケート回収率が26%という数字からは、本学への帰属意識の低さが伺える。創立記念日等を利用した講演会やイベントの開催や、大学際への卒業生参加等で来校する機会をつくるなどの仕掛けが必要である。また、在籍する教員と何らかの形で卒業生と面識を持つ機会を増やし関係を持ち続けることで、本学に愛着が芽生え帰属意識を高められると考える。今後も定期的な調査により卒業生動向について把握と評価が必要である。

看護学部卒業生の職場定着の動向 看護学部卒業生の現状調査その2

山下八重子, 三浦 康代, 松岡みどり

看護学部

本学看護学部卒業生の動向調査結果をもとにアンケートの回答者55名(回収率26%)の職場定着の動向について分析を行った。卒業後、最初の職場に留まっている者は55名中36名69%(卒業1年目を除けば60%)であった。2010年の第1期生では既に3か所目の職場が2名で、2014年の卒業生は就業1年未満にもかかわらず、既に2名が2か所目であり定着が悪いことが推察された。しかし、新たな職場に就業する者では「辞めたい」は少なかった。「職場をやめた理由」については記載の無い場合が多かったが「転居・家庭の事情・看護観の違い・体調を崩した・パワハラ・人間関係」が各1名、「結婚・病院の事情」が各2名であった。

最初の職場に留まっている者は奨学金を受けている者が約8割であり、離職しない理由に奨学金返済が理由に含まれていることも推察された。また、勤務する病院の規模が300床以上では、約6割が辞めたいと思ったことがあると答えた。しかし、「現在の仕事に関する意見」には「やりがいを感じる」等の肯定的意見は否定的意見の2倍であった。大規模病院は、はじめは最先端医療で医療現場が厳しい状況で自分が何もできなく無力感や劣等感で離職者が出るが、徐々に仕事ができるようになると自己成長の自覚がやりがいへと繋がっているのではないかと考える。回答者数が少ないため全体像を捉えたとは言えないため、さらに就職先職場へのアンケートを行い離職率の把握、離職理由の把握などを行う必要がある。

看護学部卒業生の看護における行動や考えについての 先行研究との比較 —看護学部卒業生の現状調査 その3—

三浦 康代, 山下 八重, 松岡 みどり

看護学部

本学看護学部5期生までの卒業生に対して、本学での学びの役立ち程度、また現在の仕事における行動や考えについて、先行研究と比較し課題を明らかにすることを目的とした。卒業生動向調査の質問項目である「本学での学びが現在の看護の仕事に役立っている程度」10項目と「現在の看護の仕事における行動や考え」10項目については、先行研究(愛知看護大学卒業生対象のカリキュラム評価調査報告, 2011年)と同様の項目とし、先行研究結果と単純集計で比較を行った。その結果、本学卒業生のほうが先行研究より、「当てはまる」と回答した割合が高い項目として、20項目中、「チームの一員として他職種と協力する」「看護専門職として地域に貢献する」「看護を国際社会レベルで考える」「積極的に先輩などに相談する」「看護の対象や人権やプライバシーが損なわれる、あるいは損なわれそうな時に何らかの行動を起こしている」「認定コースや大学院への進学を考える」の6項目があげられた。本学卒業生は他職種と協力したり、誰かに相談するという割合が多く、人権擁護や地域貢献の気持ちも強く、進学を考えている者の割合も高いことが明らかになった。

職場の奨学金受給の有無による看護学部卒業生の 行動や考えの比較

—看護学部卒業生動向調査 その4—

三浦 康代, 山下 八重子, 松岡 みどり

看護学部

本学看護学部卒業生の職場の奨学金受給の有無による行動や考えの比較を行うことを目的に、卒業生動向調査回答者55名のうち、主婦2名を除外した30歳以下の者42名を分析対象とした。A群：奨学金の縛りなし（奨学金受けず+奨学金返済済み）、B群：奨学金の縛りあり（奨学金返済免除のために勤務中）に分け、現在の職場が何か所目か、本学での学びの役立ち程度（5件法）、仕事における行動や考え（5件法）について比較した。検定はフィッシャーの有意確率を用い、有意水準は $p=0.05$ とした。職場を辞めたいと思ったことがある者は、A群がB群より有意に多く見られた（ $p<0.05$ ）。看護の仕事にやりがいを感じる者は、A群が63.6%、B群は52.6%で有意差はなかった。現在の職場が2~3か所目の者は、B群がA群より多い傾向であり（ $p=0.057$ ）、奨学金が人材確保につながっていない場合もあると考えられた。B群のほうがA群より、看護専門職として地域に貢献するという回答が有意に多く（ $p<0.05$ ）、研究会等にも自主的に参加する傾向であった（ $p=0.087$ ）。B群は返済義務を果たしながら、地域貢献の気持ちを持って、スキルアップにも励んでいると推測された。